コーヒーとミルク　ジキルとハイド

かまってジョニー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
コーヒーとミルク　ジキルとハイド

【Ｎコード】
Ｎ１１０５ＢＡ

【作者名】
かまってジョニー

【あらすじ】
姉が死んだ。唐突に死んだ。両親が病死してからずっと二人でがんばってきた。そんな姉さんがやっていた喫茶店を、僕はもう一度始めようと思う。

1　コヒー牛乳？

昼下がりの午後、店内は少しの客でまどろんでいる。
もともとは姉の喫茶店だった。
両親が経営していたのを両親の病死とともに姉が継いだ。
いつも頼れる姉で、両親がいなくても特に不自由にはならなかった。

綺麗で

可愛くて

頑張り屋の姉（ねえ）さん。

そんな姉目当てに、何人も男が喫茶店の常連になった。
詰め寄ってきた男もいたが、姉は全部断っていた。
そんな僕の大好きだった姉がつい先日

――――――――死んだ。

前触れは何もなく、ただ、唐突にポツリと死んだ。
結婚を控えていた時だった。
何人も男をはねのけて、ようやく一人の男性と結婚を決めた時。
姉さんはしんだ。
今でも姉さんの死は自分の中で整理できていない。
この店をまた始めたのも、それを紛らわすためなのかもしれない。
こうやって、あの時姉さんが働いていた頃、たまに来て手伝った時
のように

この店の中で働いていると…
なにか、まだ姉さんが生きているような。
そんな気がする。
「ルイくん」
名前を呼ばれて思考が現実に戻された。
いつのまにかカウンター前に男が一人座っている。
「すみません、ボーとしちゃってて。」
急いで注文をとりにいく。
見かけない顔、常連以外で名前を呼ぶということは、姉の頃の知り合いだろうか？
「ご注文は」
「喜美子（きみこ）さんによく頼んでたやつ…わかるかな？」
「姉がよく作っていた、コーヒー牛乳みたいなやつですね？」
「そうそう」
男は笑ってうなずく。
姉が経営していた頃、よくコーヒー半分に牛乳半分を入れた飲み物を出していた。
名目上はコーヒーだが、ようはコーヒー牛乳だろう。
やかんに水を入れて、お湯を沸かし始める。
「ルイくん。自分の事覚えてるかな？」
「いえ。すみません。姉の頃の常連さんでしょうか？僕も少ししか手伝いに来た事ないので…」
「そう…かー。自分、喜美子さんの婚約者だったんだよね。」
コンヤクシャ…そうか、この男が姉さんが認めた人。
あらためて男を見回す。
整ったスーツ。整えられた髪。人の好さそうな人相。
姉さんが認めただけの事はあるのか、自分の事を自分という所が少し嫌だが。
姉さんは結婚する事を決めた時も僕に相手の写真を見せてくれなかった。

そもそも付き合っていた事すらしらない。突然、相手の名前と結婚するとだけ言ってきた。
名前は…そう、セイジ。
「静司さん…でしたっけ？」
「そうそう！静司。　苗字は東雲（しのの）。」
「東雲（しのの）　静司（せいじ）さんですか。姉から名前だけは聞いてました。」
やかんが鳴り、お湯が沸いた事を知らせる。
棚からマグカップを取り出し、ペーパーフィルターが入った容器を上に置いた後コーヒーの粉を落とし
そしてお湯をゆっくりと注いだ。
「喜美…お姉さんの事は本当に残念だった。」

「はい。」

ポタリ、ポタリと、フィルターから滴り落ちる水滴の音が耳の中でこだまする。

「喜美子さんから聞いてるかもしれないけど……自分は、刑事をやっていてね。」
お湯が全部したたり落ち終わり、不要になった容器をカップの上からどかす。
「それで…、今、喜美子さんを襲った通り魔。それと同じ犯行の事件がもう…3件起きてるんだ。」
カップになみなみと牛乳を入れ、出来上がったコーヒーをカウンターに差し出した。
「何が言いたいんですか？」
「君は、あの時あそこにいた。つらいとは思うが、思い返してみてくれないか」
「何を思い返せと、見た事は全部ほかの刑事さんに話したはずですよ。」

「そうなんだが。何か思い出した事とかないかな。」
「そいつは白いコートを着て、顔はコートの帽子を被っていてよく見えなくて…そいつが姉さんの首を切って…してたとき、には。僕は…ビビッて」
そう。
その時、姉さんが首を切られて首にかみつかれてた時、僕はビビッていた。
怖くて、恐くて、震えながら地面に座り込んでいた。

「すまないな。気を悪くさせるつもりはなかったんだ。ただ、自分も刑事として、喜美子さんを愛していた人としても……やつを。」
そう言って彼はコーヒーを一息に飲み干すとお金を置いて店から出て行った。
彼もまた自分の中で整理できていないのだろうか

姉さんの死を。

あの時ぼくは、なぜ。なぜ怖くなって。
痛くなるほど手を握りしめていた。
行き場を失った思考を痛くなるほど握りしめた拳に乗せてカウンターに叩きつける。
遠くの席に座っていた数人の客が驚いてこちらを見た。
かまうもんか今日はもう、閉店だ。

2　コーヒーはやっぱり苦い

玄関で制服についていた雨水を払う。
外は霧雨がが降っていて、学校からの帰り道でついた細かな霧が大きな水滴となってまとまって落ちた。
居間に入って時刻を確認すると午後9時。
誰もいない家…一人で家にいてもつまらないので、コンビニやゲーセンで時間を潰した。
姉が死んでから、この家にいる事はほとんどなくなった。
喫茶店を開ける時、寝るとき、たまに家で食事する時以外は外に出て気を紛らわせる。
もう3週間も経つ。
それなのに気は晴れない。まだ整理がついていない。
今でも、まだ姉(ねえ)さんがどこかで生きているような。
そんな気がしてしまう。
携帯を確認すると友達からメールが来ていた。

『今日、カラオケで合コンやらない？』

遠慮するのメールを返信して携帯を閉じた。
今はまだ誰かと遊ぶ気にはなれない。
自分の中で決着をつけるためにも

姉さんを殺したやつを探し出して殺す。

それしか。それしか自分に決着をつける方法はない。
制服を脱いで普段着に着替えた。
これまでに姉さん以外で3件、同じような事件が起きている。
襲われるのは全部女性。

頭を殴打され、喉を切られる、喉に噛みつかれて血をを吸われ喉の肉を食われる。
今ではテレビでも取り上げられているが、僕はテレビよりも先に現場で見た。
３件とも現場でみた。
あの日から、あいつを探すために夜は毎日外に出ている。
叫び声が聞こえて毎回そこにいくが荒らされた死体だけ残して、あいつはもういない。
一度だけ走りさるあいつが見えた。
あいつは今でも、白いコートを着ている。
姉さんを殺した時と同じ色のコート。
その時、携帯が電話をしらせる音を鳴らした。

非通知設定

通話ボタンを押す。

「オ…マエ…ガ…」

「もしもし？」

「オレ…ネエ…サン…ナンデ」

「もし」

「ナァァァンンンンデエエエェェェ」

……

……

通話が切れても携帯が耳から離れなかった。
あいつ…か？
今のはあいつだったのか？
どこからともなく湧いてくる、先ほどの電話が姉さんを襲った犯人だという確信。
なんでこの電話番号を…。いや、そんなのはいい。
あいつを！
突然来た激しい衝動に駆られて、玄関を飛び出した。

□■□■□■□■□■□■

あいつを
殺す。
確実に

殺す。

あいつは今日、絶対だれかを襲う。

その時、僕があいつの喉元を掻っ切る。

刃物がなかったとしても指で肉を抉り取ってでも殺す。

霧雨が走った体についてはまとまって水滴となって髪から垂れた。
顔についた雨を手でふき取る。
姉さんの敵(かたき)をとる。
それだけが強い衝動となって頭の中で轟音を立てながら回っていた。
走る。奔(はしる)る。走(はしる)る。
闇雲に走っても意味がないと知っていても動かなければ気が済まない。
止まったとたんに、自分の中で何かが崩れそうな気がした。
そのうち叫び声が聞こえたらそっちに全力で走ればいい。
犠牲者なんてどうでもよかった。
誰が死のうが関係ない、あいつだけを。あいつを殺す。

「っっいっっっっあ」

声にならないような、押し殺した叫びを耳が捉えて立ち止まった。
頭の中で声がした方向を確かめ、大通りへ向かって走る。
一瞬めまいのような感覚が体を襲った。
目の前が三重になって見える。
途中、なんどか車にクラクションを鳴らされたが、どうにかよろけながらも走った。
止まるわけにはいかない、今日こそ、今度こそあいつをやる。

そして、やつはいた。
道のすぐ脇の路地、街灯に照らされて、真っ白なコートを白銀に輝かせながら
横たわった女性の喉にかぶりついて、真っ赤な鮮血を噴出させていた。

こ…ろす。

ころす？

僕がこいつを…ころす…のか？

そんなこと…できるわヶ

気配に気づいたのか、そいつは顔をあげてこちらを見た。
コートの帽子を被り、影になって顔の部分はぽっかりと黒い穴が開いているかのよう。
その帽子の影に隠れた顔の暗がりの中に爛々と青く光る二つの目。

震えている。

手も、足も、あの日と同じように、震えている。

動かない。

動いてくれない。

今、手足が動いたら僕はこいつを殺すだろうか？
いや、きっと僕は逃げる。

興味をなくしたのかそいつはまた女性に噛みつきはじめた。
吹き出す鮮血。
今動けば、逃げられる。
動いてくれ。
震える手に必死で力をこめた。
ピクッと指が動く。
動ける、あと少しで動ける。
だが、そいつはそんな事を待っていてはくれなかった。
満足したのか、そいつは女性の首から口を離し、立ち上がった。
くるな。

こないでくれ！

もう殺意も強い衝動も、全部燃え尽き、砕け散り、今残っているのは恐怖だけだった。
徐々に近づいてくる。
一歩、また一歩、フラフラと。
あの速度なら…もう足が動きそうだ。
足の動かし方を頭の中をかき回しながら見つけ、僕は動かすために足に力を入れた。

背中の激しい激痛とともに、目の前にそいつの顔があった。
空から落ちてくる雨粒がキラキラと輝いていた。
空が見える。

倒れている？

倒されている？

なんで、僕は倒されている？
僕の上にのっかる形となったそいつの背から霧雨が光に反射して、翼が生えているようだった。
「ナ…ン…デ…」
擦れて、しかし聞き覚えのある声が帽子で影になった穴から聞こえた。
「ナンデ…オ…レ…ハ」
「ナンデオレハアァァァ！！！」
吠えるように叫んで、そいつは走り去って行った。
霧雨がまつ毛につき、まとまって目頭から流れ落ちる。
これは涙じゃない。
恐怖はとうに振り切れ、思考は何も反応しない。
そいつの叫びだけが頭の中にこびりついて離れなかった。

それからどうやって家に戻ったのか。
ただ、人間は安心すると普段通りの行動をしてしまうのだろうか…
コーヒーを入れた。
カップを取り出し、ペーパーフィルターが入った容器を上に置く。
そしてコーヒーの粉を上に落として、お湯を注いだ。
ポタリ

ポタリ

容器からお湯が一滴一滴、コーヒー粉を通して茶色く色づきカップに落ちていく。
やがてカップの上から容器をどけた。
両手でカップを持って、温かさを確かめる。
一口飲んでミルクを入れ忘れた事に気が付いて後悔した。
ミルクの無いコーヒーはやっぱり苦い。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1105ba/

コーヒーとミルク　ジキルとハイド

2012年1月3日00時50分発行